



図 25a 兎型のカードホルダー（左右のパーツを正面から見たところ）【右】
 図 25b 兎型のカードホルダー（左右のパーツを分けたところ）【左】

をよく見ると鋭い目や全身を覆う柔らかな毛並み、きちんと足を揃えて座るつま先の様子などが、微細な彫りで捉えられており、その形は奇妙にリアルである。兎の丸い体は一個の立体のように見えるが、実は中央部分で二つに分かれており、左右対称二つの部位が貼り合わされて出来ている【図25 a・b】。カードホルダーとして日常的に使うことを目的としているため、貼り合わせには磁石が使用されている。オブジェの大きさは高さ六〇×横幅七〇センチ、また二つを張り合わせた際の厚みは三〇センチほど。オブジェ全体の大きさは、ちょうど大人の手のひらが隠れるほどである。

おそらく元の木型は、微塵粉に砂糖を混ぜた材料などで打菓子（落雁）を作るためのものかと考えられる。従って、現代の私たちが通常考える干菓子の大きさからすれば、これはかなり大きな干菓子と言えるだろう。しかも本書でもこれまで紹介してきた、今日巷に出回っている兎型の打菓子の造形と比較すると、細部の表現が「あまりにリアル」であり、「獣」としての兎を如実に思い起こさせる。そのためこれをそのまま「食べる」と想像すると、現代の私たちには違和感すら覚えるのである。——そのようなことを考えつつ、この和紙オブジェの兎を手にし、改めて見直すと、古の日本人が菓자에イメージしていた世界観が、また別の角度から立ち現れてくるような感覚になるのである。

さてこの和紙オブジェは、現代アート作家・永田哲也氏の手になるのである。永田氏は一貫して和紙を使ったオブジェ作家として知られており、とくに張子のような手法を用いて古い菓子木型から作り出す一連の作品を「和菓紙」^⑬ また「記憶紙」と名付け、ギフト用の小物やインテリアなど日常生活の中で使える小型の作品から、ホテルのロビーや百貨店の店内装飾を目的とした大型のインスタレーション作品まで、近年精力的に発表している。

永田哲也氏は一九五九年大阪府生まれ。東京芸術大学で構成デザインを学び、八五年同大学院美術研究科修士課程修了。造形作家としてデビュー後は、外回りの営業サラリーマンのすり減った革靴の底やマンホールの蓋、シヨベルカー、産業廃棄物など、普段人が注視することなくいずれば消え去る物たちの「型」を取り、そこに現れる現実の「表皮」としての痕跡から、人間の五感や記憶のイメージを三次元の立体物で再表現するという作品を発表し続けてきた。

そうした中で永田氏が出会ったのが、現代ではほとんど顧みられなくなった伝統的な祝菓子である「鯛」の木型であったという。それをきっかけに和菓子職人はもちろんのこと、菓子木型そのものを作る職人も対話するうちに、永田氏は物としての菓子木型の造形自体に心惹かれ、自らも木型を収集。現在では二千個ほどを所蔵しているというが、和紙オブジェの制作に用いる木型は自身がコレクションとする木型だけでなく、他のコレクターや全国各地の菓子舗にも協力を仰いでいる。

桜や梅、松、そして鶴や亀、鯛、七福神等々、現在ではめつたに使われることがなくなったこうした菓子木型のほとんどは、かつては日本のどこにでも存在した「寿ぎ」や「祝い」の意味を伴ったかたちである。永田氏の作り出す「和菓紙」作品の真骨頂は、こうした「祝い」の造形を組み合わせ、とくに大型のインスタレーション